

小さい僧の物語

◎ 地蔵説話

瀬戸内寂聴／秋野不矩・絵



20

平凡社名作文庫

僧の物語

◎ 地蔵説話

瀬戸内寂聴／秋野不矩・絵



20



——筆者紹介——

瀬戸内寂聴（せとうち じゃくちょう） 1922年生まれ。

作家。著書に『田村俊子』（第1回田村俊子賞受賞）、『夏の終り』（第2回女流文学賞受賞）、『かの子猿乱』『京まんだら』『古都旅情』『比叡』など多数。

秋野不矩（あきの ふく） 1908年生まれ。

『やての童子』などがある。

小さい僧の物語

定価一、三〇〇円

一九八〇年三月一〇日

初版第一刷発行

著者 瀬戸内寂聴

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四の一 一〇二

電話 東京（〇三）二六五〇四五二（大代表）

振替 東京八二九六三九

本文印刷 東洋印刷株式会社

表紙印刷 株式会社東京印書館

製本 和田製本工業株式会社

不良本はお取り替えますので、直接小社サービス課までお送り下さい（送料は小社負担）。

も
く
じ

はじめに……6

小さい僧の物語——説話の中の十七話

はきため地蔵……12

隣のじいさま……22

笠地蔵……35

かす地蔵……41

亀を助けた男……49

絹をくれた地蔵さま……59

伊豆の生き地蔵……64

生きかえった蔵満……68

夫を地獄から助けた尼……73

六地蔵を造った神主……76



矢を負った身代わり地蔵…… 81

にぎりめしを食べた石地蔵…… 87

雪の下から助けられた男…… 94

もみ地蔵…… 98

忘れた錫杖…… 101

疫病神を追っばらったこと…… 105

提婆の太兵衛…… 109

石童丸——善光寺の親子地蔵…… 115

山椒太夫——安寿と厨子王を守った地蔵さま…… 147

寂庵の地蔵盆…… 197

賽の河原地蔵和讃——“おわりに”にかえて…… 207



表紙・扉絵 秋野不矩

装丁 上野 球

小さい僧そうの物語

— 地藏じざう説話 —

はじめに

日本の町や村には、数えきれないほど、道ばたに石のお地藏さまが立ったり、すわったりしていらっしやいます。

都会では、道路が広くなり、ビルが建ち並び、そんなお地藏さまも、次第に姿を消していきすが、それでも、ふと迷いこんだ道ばたに、ひっそりと地藏堂が残っていたりして、おやと、びっくりすることがあるものです。

お地藏さまは、子どもを守ってくれる仏さまとして、むかしから人びとに信仰されてきました。

お地藏さまに赤いよだれかけをかけるのも、冬には毛糸の帽子や頭巾をかぶせるのも、赤ちゃんが丈夫に育つようにというおかあさんたちの願いと祈りがこめられているのです。

むかしは医学が今のように進んでいなかったし、人びともとても貧しい暮らしをしていたので、赤ちゃんや子どもたちは、病氣にかかると、どんどん死んでいきました。

子どもを死なせたおかあさんやおとうさんは、死んだ子どもが、地獄で苦しめられないようにと、お地藏さまを立てて祈りました。田舎へ行くと、道ばたに、小さな小さな石の仏さまがいくつも並んでいるのを見かけます。あれはみんな、子どもをなくした親たちが、お墓がわりに立てたものでした。

今でも町の地藏堂の中に、そういう小さな石仏の、顔も姿も風化しておぼろになったようなものがまつてあるのを見かけます。人びとはそれもお地藏さまといって拝み、花やお水をお供えています。ほんとうのお地藏さまのお姿は、頭に髪がなく、まるい坊主頭で、衣を着て、左手に玉、右手に杖をついて立ったお姿をしていらっしやるものです。けれども、もっと古い時代のお地藏さまは、玉も杖も持っていないのもあります。

頭を剃って、衣を着ている姿は、人間のお坊さまとそっくりです。それはお地藏さまは仏さまだけれど地藏菩薩と呼ばれる位の仏さまだからです。

菩薩というのは、人間の姿をして、人間の中に姿をあらわして、人間とまじわり、その苦し

みを救ってくださる仏さまをいいます。

こうしたお姿のお地藏さまを人びとはありがたく信仰しながら、なつかしく親しんできました。

お地藏さまのご利益というものも信じ、その話がいくつも語り伝えられました。

鎌倉、室町時代には、そんな話がたくさん絵巻物にもなって人びとに読まれました。

この本には、むかしから伝わったお地藏さまのお話の中から、おもしろいものを集めてみました。

『今昔物語集』、『宝物集』、『地藏菩薩靈驗記』、『沙石集』、『延命地藏経直談鈔』などの中から短いお話をとり、『説経節』の中から、有名な安寿と厨子王や石童丸の話をとりました。

短いお話の中には、よく、お地藏さまが、小さな美しいきらきらした僧の姿になってあらわれ、人びとの苦しみを助けてくださるという形になっているのが多いので、この本の題に『小さい僧の物語』とつけました。

仏の霊が心の清らかな子どもに化身するという考えかたは日本だけにあるものです。

この本をつくるのにたくさんの人びとの地藏研究の本を参考にさせていただきましたが、と

くに、まだ本になっていないたいせつな資料の『延命地藏経直談鈔』をお貸しくださった京都大学の佐竹昭広先生に深くお礼を申しあげます。

オンカカカビサマエイソワカ。

合掌 がつしょう

小さい僧そうの物語——説話せつわの中の十七話



はきだめ地藏^{じぞう}

日本に生まれ、日本に育った子どもなら、お地藏さまを知らない子はいないでしょう。田舎^{いなか}の村の峠道^{とうげみち}や田んぼのあぜ道のかたわらにも、町の横町の入り口にも大都会のビルのかげにも、お地藏さまはひっそりと立っていらっしやいます。お寺には国宝や重要文化財^{じゅうようぶんかざい}になったりっぱな木彫り^{きぼり}のお地藏さまもまつられています。子どもたちがいつも学校のゆき帰りや、縁日^{えんじち}でおなじみのお地藏さまは、石に刻んだ石仏^{いしぼとけ}さまです。

だれがかけたのか、たいていのお地藏さまは赤いよだれかけをかけていたり、頭に赤や花柄^{はながら}の布でつくった頭巾^{ずきん}をかぶっていたりします。そのようすは、どう見ても子どもに見えます。子どもたちはそんなお地藏さまになんとなく親しみを覚え、友だちのような気がしてしまします。

町へはバスで三十分ばかりの郊外こうがいの、まだ畠はたけや田んぼのある村むらの森陰もりかげにもお地藏さまが立っていました。学校のゆき帰りに、決まってそこを通る男の子がありました。男の子は時どき、小石を投げつけてみたり、げんこでまるい頭を叩たたいてみたり、いたずらをしかけてみたくなります。お地藏さまは、そんな時でも、いつものほのぼの笑わらった表情のまま、されるままになっています。

いたずらっ子は相手にならないお地藏さまに向かって、

「ちえっ、つまんないの。退屈たいくつしないのかなあ、まったく」

といいながら、まるいおつむをつるりと撫なでて通りすぎようとします。陽ひにぬくもって、お地藏さまの頭は人肌ひとはだのようにあたたかく、男の子は手のひらに伝わったぬくもりにおどろいて、おやつと足をとめ、も一度お地藏さまの顔を見つめてしまいました。ふと、お地藏さまが生きているように思ったのです。いつからここにこうして、お地藏さまは立っていらっしやるのでしょうか。長い年月の風や雨や雪にさらされて、お地藏さまのお顔はほのぼのとやさしく、笑っているように見えたのです。それだからいっそうそのお顔はほのぼのとやさしく、笑っているように見えたのです。いや、よく見ると、泣ないているようにも見えてきます。

「ほんと、退屈しないのかなあ」

片時もじっとしてられないほど元気にみちた男の子は、もう一度口の中でつぶやきかえし、ランドセルをゆすりあげて走り去っていきました。

女の子が竹藪の中の道からあらわれました。椿の花でつくった花輪をさげていて、お地藏さまに近づくと、黙ってその首にかけました。少し長すぎたので、女の子はもうひとまきしてお地藏さまの首にまわしました。二重になった花のレイをかけてもらって、お地藏さまはやはりほのぼのとほほえんでいらっしやいます。女の子も満足そうにほほえんで、お地藏さまの頭をそっと撫でて通りすぎていきました。

黄色い蝶々が飛んできて、お地藏さまの頭の上へとまりました。

「ああ、くたびれたわ。今年はあたたかくて、花がいっせいに咲くんだもの、目うつりがしてしまふ」

「花の蜜はおいしかったかい」

蝶々とお地藏さまはことばが通じるようでした。

「ええ。でも、あぶなくってしょうがないのよ。農薬がいっぱいまかれていて、むかしのよう